

令和4年度 第2回 新潟市男女共同参画推進センター運営委員会 議事概要

日 時： 令和4年11月30日（水） 午後1時30分～3時30分

場 所： 新潟市万代市民会館 307・308研修室

出席者： 新潟市男女共同参画推進センター運営委員

石原委員、塩沢委員、高橋委員、田中委員、永田委員

事務局（男女共同参画課）

笹川課長、竹田課長補佐、三間主査、大塚職員、弦巻職員

1 開会

2 男女共同参画課長あいさつ

3 報告

(1) 令和4年度事業報告（4月～10月開催事業）

（事務局） 各担当より主催事業の報告

（田中委員） No.2「男性の生き方（子育て期）講座」の第1・2回は写真に関わるが多く、アンケートの感想を見ていると写真の撮り方や父親同士で話し合いができたことに対する評価はあるが、アルザで行う講座なのでどのくらい男女共同参画の関わりがあったのか教えてほしい。

（大塚職員） アンケートは写真の技術的なことを書いてきた方が多く、講座の内容がなかなか伝わらないが、第1・2回でパパが写真を撮ることや整理することが、家族のコミュニケーションのツールの一つとなるという観点から話をしてもらった。例えば、第1回の笑顔写真家の講座では、「父親としての自覚が写真を撮ることによって芽生える」、また「パパがママと子どもの親子写真を撮ることによって家族のコミュニケーションとなる」、「撮って終わるのではなくそれをフォトブックにするなどの共同作業が生まれる」など、コミュニケーションをもっと密にとっていくことを写真というツールで教えていただいたと思っている。第2回では、講師の話の中に、「育休中の妻が家族アルバム共通アプリを通して離れた実家の両親などとコミュニケーションがとれたことを喜んでいてのを見て、妻が育休中に家で子どもと2人の時間が多く、孤独だったことに初めて気がついた」という話があった。写真を通して見えること、スライドで家族の自慢をするコーナーの中で他の家族の話聞いて見えてくることもあり、それぞれの家族のかかわり方のきっかけを知ることができたという感想もあった。

（塩沢委員） No.2「男性の生き方（子育て期）講座」で「今年度見えたニーズがあった」と説明していたが、具体的にはどんなことか教えてほしい。

（大塚職員） 昨年度までは、毎週で行っていたが、子育て世代の方が毎週、親子で出掛けることは難しいという意見が企画委員からあったので、少し間を空けて日程を設定したら、参加者が少し増えた。企画委員との振り返りでも「1ヵ月に1回だと少し気持ちが下がってしまうが、毎週または隔週でも忙しいので、隔週でも定めないで少し間隔を空けるというのはニーズに合って集客につながった。また、ママもパパも両方が聞いてみたいと思うことを題材にして、その中にいかに男女共同参画を入れていくかを考えていくとよい」という話をしており、

このことが今年度の実施により見えた点である。

(塩沢委員) 気になるのは、自ら活動の場をつくるという方向性があったらよいのと思う。そちらの方に導くというようなことが総括にあったらよかったと思う。

(大塚職員) 自ら場をつくるという動きは見えてきてはいないが、団体の形成や活動につながる動きが出るようにこちらも促していきたいと思っている。

(竹田補佐) 今回、講師をしていただいた方は、はじめは参加者で、その次は企画委員に、そして今回は講師としてお話していただいた。参加者から更に興味を深められて、講師もされるという方が出てこられたことや、今回の参加者の中に来年度の企画委員に手を挙げてくださる方が多くいらっしゃったことは、講座参加から一歩前へ踏み出してくださった方もいらっしゃったものと思っている。

(塩沢委員) 講座でいろいろなことをきっかけに職員から働き掛けを受けながら、というのは大きかったと思う。その辺はとても大事だと思う。そういう方がいらっしゃるのとはすごくよかったと思う。

(石原委員) 全体的に話を聞かせてもらって、時代に合った時間、間隔、曜日を試行錯誤されているのがよくわかった。共働き世帯が増えた中で平日だと参加しづらい人も増えているだろうし、一方で土日が続くと実施する側の負担もあり、維持していくのが課題になっていくので、そこら辺の折り合いが大切だと思う。また、参加者が企画委員になって事業にかかわっていく流れがあるということは評価できると思う。

No.3「女性の起業を支援する講座」について、女性の起業は全国的に流れが出てきていて、女性の起業に関するセミナーの参加者が増えている。入門編だったが、実際に役に立って将来的に始めてみたいと起業につながっていけばよいと思った。

No.9「相談室連携講座」については、毎週連続5回は負担がある。ハードルが高くなる。間隔を空ける、家でできることはやってもらう、もしくは回数を減らすなどして、負担が少ないやり方にした方が参加者も参加しやすいと思う。

(田中委員) 昨日、新潟市男女共同参画審議会があり、ある委員から講座に出た時のアンケートで男女共同参画の講座だけでも男女共同参画が出てくるのは最後の質問だけという話があった。もっと踏み込んで、アンケートの中に男女の平等感や講座の内容に合わせて、パパ向けの講座であれば普段の家事状況について妻と夫とそれぞれにどんな状況か聞くとか、起業の場合は女性の働く場の平等感をどう感じているかを聞くなどがあってもいいのかなと思う。昨日、その委員の話を聞いて私もそう思ったので、どのようなものかと思いを話した。

(竹田補佐) 委員がおっしゃるように講座の内容に合わせてそのような質問をアンケートでお聞きするのも私たちにとっても参考になるので、よいアイデアをいただいたと思っている。アンケートによって参加者のニーズを知る機会になるので、聞いていきたいと思う。

(塩沢委員) No.8「子育て支援講座」で会場に行けない方はオンライン受講できることはよい方法だと思うのだが、会場受講4人、オンライン受講19人とあまりの落差にびっくりした。オンライン受講だと対面の良さを得ることができず、その機会を逃してしまうが、その問題点をどのように整理しているか。

(大塚委員) 補足ですが、4組のご夫婦が会場受講の予定だったが、体調不良などで2組欠席になった。対面の良さもあることは講座をしながら感じている。オンライ

ンでも対面のような良さを作っていくよう模索しているところ。

(竹田補佐) 若い方はオンラインを希望される方が多く、お子さんが小さくて保育に預けられない方もオンラインによって参加できるメリットもある。参加者の話を聞くと対面で話をしてよかったという感想もあり、対面の良さもあると思うので、内容によってオンライン、対面と使い分けていきたい。新型コロナウイルス下で、小さいお子さんがいらっやって外に出て対面で参加しにくい方でもオンラインで参加できるというメリットもある。今回は子育て世代の方が対象で、また対面で申し込んだ方も体調が悪く止められたという方もいらっやってので、人数が少なくなってしまったと思うが、それぞれ良さがあると思うので、内容に合わせて使い分けていきたいと思っている。

(石原委員) 新型コロナウイルス禍以降、東京などでの講演会がオンラインになって、今までより参加しやすくなった。今回は併用だったが、もしかしたらオンラインだけでも形としてはありなのかもしれないと思う。参加者同士の交流という意味では対面に比べたらマイナスだが、私たちの会社のカルチャー教室もオンライン講座がある。そういうやり方はむしろ取り入れていってもよいと思う。場合によってはオンラインで行えば、講師の交通費負担の面でのメリットもあり、遠方から来てもらって人数の少ない会場で話してもらうのに気が引けることもあると思う。そういう時にオンラインで行えば、対応してくれる人もいらっやってと思う。そういったこともむしろ柔軟に考えていってもよいのではないかという印象を持った。

(竹田補佐) 県外で交通費がかかるとお呼びできない講師もオンラインだとお願いできることもあるので、繰り返しになるが内容によって使い分けて行っていきたいと思っている。

(高橋委員) No.3「女性の起業を支援する講座」は今回、入門編だったが、起業となると準備とか知識が必要になってくると思う。入門講座の受講者を更に次の段階に誘導するとか、入門講座の中で次につなげるような内容や連携はあるか。

(三間主査) 前回、令和2年度は中級編の内容で開催したところ、アンケート結果でもっと基本的な内容や仲間づくりをしたいという意見があったため、令和3年度に入門編を企画した。新型コロナウイルス感染拡大で中止したが、多くの申込みがあったので、令和4年度に実施した。

(竹田補佐) 今回、講師として、第1回目は新潟市産業振興財団の方、第2・3回目はキャリアコンサルタントの方からお話していただいた。第2・3回目の講師が起業されている方なので、ご自身も新潟市産業振興財団に相談に行ったという話をされ、起業に向けて次の段階に行きたい方は具体的な支援制度などは新潟市産業振興財団などに相談に行くよう促して進めていただいた。

(永田委員) No.2「男性の生き方(子育て期)講座」のアンケート結果を見ると配偶者やお子さんについて書かれていることがあまりないという印象で、そういう意味では前半に話があったが、趣旨的に外れている部分もあったかなと思われる。今後も同様のことがあれば修正していただきたい。No.12「上映会」は、妻の大変さを理解するという内容の映画のようなので、男性の参加が1割だったことは残念だった。

(竹田補佐) 子育て期の男性の参加者の集客に苦慮しているところで、今回、写真というツールを使うことで興味を持ってもらい、講座に参加いただけるように企画し

たが、アンケートの感想では配偶者やお子さんについての記載が少なかつたと思つている。そういったところも感じたり考えたりしていただけるような内容に工夫していきたいと思う。

(事務局) 欠席の多田委員からもご意見をいただいている。「No.9「相談室連携講座」について参加者の年齢層が高くなつてきているが、講座のターゲット層はあるか。あればどのように絞つているのか。もし若い世代をターゲットにしているのであれば、講座の日時等を変えていく必要もあるかもしれないので。」

(弦巻職員) 年齢層のターゲットは特に設けていない。年齢にかかわらず、生きづらさを抱えている女性が対象の講座。今回、年齢層が高くなつてきていると感じられたのは、今年度は「自己尊重」をテーマにした講座であること、日曜開催にしたことで、ちょうど働き盛りの40・50代の方が自分の人生を振り返る余裕ができたことで、目に留まつたのではないかと思われる。昨年度の「自己表現講座」は平日開催で30代の子育て世代の方が多かつたということもあるので、今後は開催日時や回数も含め、検討していきたい。

4 その他

(1) 男女共同参画市民団体協働事業の見直しについて

(事務局) 市民団体協働事業がここ数年は申請事業が少なく、同じ団体が繰り返し採択を受けて、力のある団体が自立していかないという状況にあることについてどう思うか、昨年度の運営委員会でご意見を伺つた。そのご意見を踏まえて、令和4年度は見直しを検討することとしていたため、今回は見直し案についてご意見をいただきたい。

担当より見直し案の説明(見直し内容については資料2のとおり)

(永田委員) 資料2の「R5からの採点・審査方法案」の①と②については、申請事業が少ない、同じ団体が繰り返し採択を受けているという現状の問題点とやや結びつかないのではないかと思うのだが、それについて説明してほしい。

(三間主査) ①は、まずは全体の平均点で市民団体協働事業に適していない事業は不採択とし、②は委員の中で審査の偏りが無いよう半数以上の委員が15点以下となる場合は不採択としている。

(永田委員) 15点の実効性があるレベルなのか。どれくらいが採択されると想定しているのか教えてほしい。

(三間主査) 今年度は4団体の申請があつたが、1団体不採択となつた。

(塩沢委員) 現状の解決につながるのか実効性に非常に疑問がある。力のある団体に行政の手の届かない部分を活動してもらい補つてもらうのがこの事業の趣旨だと思う。これは逆効果ではないか。ますます手を挙げる団体が減っていくのではないかという危惧を強く持つた。不採択になつた場合、説明はどうやってするのか。男女共同参画行動計画の中の防災の項目の事業評価で、ここに市民団体協働事業に挑戦した方の事業が実施事業として事業評価に上がつてきている。それだけの存在感がある事業となつているので、繰り返し同じ団体とか、偏つていたりとか、そこだけで評価することはどうかと思う。実力を蓄えてきた団体に対して差をつけていく形の見直し案についてはこれでいいのかという感じを強く持つた。

(笹川課長) 見直し案の①と②は今回の解決策とは別問題で、まず市民団体協働事業とし

ての適格性を見るものになる。新規団体が少ない、同じ団体が繰り返し採択されているということに対しての解決策は、一つ目の新規団体を増やすということとをどれだけ頑張れるかということにかかってくるかと思う。力のある団体が採択されることについては否定するものではないが、最近、同じ団体が繰り返し採択されているので、新規の団体に出てきてほしい。新規の団体と既存の団体があつた時は、普通の審査を行った上で、新規採択という項目を1つ増やして、既存の団体よりは新規の団体に最高5点で加点をするということだけなので、最初から既存の団体を否定している訳ではない。新しい団体の方に出てきてほしいので、今回の審査方法案を提示させていただいた。「採点・審査方法案」の①と②については団体が行う事業の内容の優劣を見て判断をするもので、これまでと変わりがないと思っている。なるべく新規の団体に出てきてほしいし、行政として委託事業として経費を執行する訳なので、同じ団体ばかりずっとというのは適切ではないと考えている。

- (塩沢委員) 7月の審査のことが話に出たが、内容的に男女共同参画の趣旨で行うべき事業なのかというところで不十分な部分があつて、例えば12点だったのが5点加算されると17点になり、実施されてしまうことになる。また、専門性が高くなつた団体が、市の事業の中にきっちり入っていく所があるわけで、そういう人たちを使ってグループを育てるようなことも考えられる。例えばアルザの相談室や図書室を活かすような内容にしているかを審査項目にして、もう一つステップアップするようにしてもらつてほしいのかと思う。
- (石原委員) 表現のニュアンスが違つただけで、要は新しいチャレンジをする所に加点をするということだと思ふ。下駄をはかせるといふか、新規だから若干の期待を込めてということと加点ということとあればそういうふうな表現にした方がよいと思ふ。「減点や打ち切ります」といふトーンではなくて、新しい所には応援するといふトーンにして、ニュアンスを変えた方がいいのではないかと思ふ。
- (高橋委員) この事業は協働事業にすることによつて、自ら男女共同参画を進めていくような団体を育てようといふ趣旨なのか、いろいろな団体と協働して事業を実施して啓発、アプローチする趣旨なのか、どつちなのかわからない。もし団体を育てようといふ趣旨であれば、3回以上できないといふことでいいような気もするし、そうではなくて一緒に盛り上げようといふ趣旨であれば、何回でも構わないような気がする。
- (竹田補佐) この事業は今、おっしゃられた、団体のノウハウや専門性を活かしていただき、市と協働して男女共同参画を推進することと団体の活動の活性化を図ることの二つが目的である。
- (塩沢委員) 防災のことだが、防災課職員に聞いても女性の視点で防災を考えるのに何をしたらよいかといふ話になる。そういう時に市民の中で防災に関する活動をしている女性たちがいて、市民団体協働事業が活きているのだなと実感した。個別の事業についてだがそんな感想を持った。
- (永田委員) 「減点」はフレーズ的にどうなのかと思ふが、回を重ねてきている団体は排除するといふよりは、自立してますます元気にやってもらいたいといふ趣旨でよいか。その辺りがよく伝わるような方策があるとよいと思ふ。お金をかけなくても自立していくことを助ける方法があるのであれば、そういうことを考えてあげるのも手としてはよいのかと思つた。

- (塩沢委員) 応募数が減るような気がする。この見直し案の文章を読むとそちらの不安を持つ。「減点」のインパクトに比べて、「新規団体の申し込みを促す」は広報で周知させるしか方策がない。
- (三間委員) 新規団体の申し込みを促すというのが課題で、アルザフォーラムのワークショップに参加した団体の中で市民団体協働事業に促していくとよいと思われる団体に声がけしている。委員の皆様にはどうやっていけば新規の団体の申し込みが増えていくのかお知恵をいただきたい。
- (高橋委員) マンネリ化している。毎年、同じ団体が同じようなことを行っている。この事業の予算に依存している。毎年、趣旨は悪いとは言わないが内容が固定化されてパターンが決まっている団体がある。この事業の事業効果をどこで判断するのか。行政側でどう判断しているのかわからないが、発展性がないと行政側としても評価を高くすることができないような気がする。現状、同じような団体しかないから新しい団体を勧誘しようとか、広報して応募を促そうということだが、それによってどれだけ効果があるのか。センター自体が30年となるとテーマに新規性とかワクワクするものが女性の立場でもそういうのが感じられなくなっているのではないかという気がする。そうするとどう公募しても応募する団体も固定化していかざるを得ないのではないかと考えられる。事業のあり方を少し見直ししてもよい気がしている。
- (塩沢委員) アルザの講座のあり方からヒントを見出すのが、一番近道ではないかと思う。参加者でもっと交流がしたいという方たちに働きかける。女性問題は見えにくくなっている。男女の役割分担が前提になっていることが問題になっているのではないかという指摘がある。その問題は昔から変わっていないと思う。私たちと同じような息苦しさを感じながら子育てをしている若い女性たちがたくさんいるし、働いている女性たちは職場と家庭の二重の負担があり、そういう課題は相変わらず終わっていないはずだと思う。そういうのをアンテナで感じて参加してくださる方がいるわけなので、参加者自身の能力を役立たせていただきたい。
- (竹田補佐) 応募には5人以上で男女共同参画の推進に資する活動を1年以上行っている団体という要件があり、講座はそれぞれ個人で参加だが、参加されている方の中にもそういう活動をされている方がいらっしゃるかもしれないので、声がけしていくのも一つの方法かなと思った。
- (石原委員) 申請対象の要件の5人以上を2・3人に少なくするという方法は検討しないのか。このご時世、新しい団体はそうないのではと思う。
- (塩沢委員) アルザは馴染みやすく、足を運びやすくということを重視して入門編の内容が多いので、専門性のある団体が育っていかないのではないかと。専門性のある市民の活動によって市の事業を補足する、補うという協働事業の考え方の再検討をした方がよいと思う。そこから変えていかないと続かないと思う。
- (竹田補佐) 今回は新規の団体を増やすことを目的に見直し案を作ってお聞きしており、そこまでは考えてはいなかった。
- (永田委員) 基本的に塩沢委員がおっしゃったような講座に参加した方が仲間を作ってもらい、新規に手を挙げてもらうということが一番良いと思う。ただ来年度という話になると短期的な視点というのも必要なのかなという気がする。両建てで考えていく必要があると思う。

(石原委員) 表現のニュアンスが逆の方にとられるという心配はしたが、基本的にはこの見直し案でとりあえず1年間やってみてはどうかかなと思っている。それでまた来年、新規団体が増えないのであれば、根本的なことがどうかということになると思う。まずは声がけをするなどの地道なことでやってみてはどうかと思う。

(竹田補佐) まずは声がけや周知などの広報を考えていき、来年度新規団体が増えないようだったら、事業そのものについて考えるという方向で考えていきたいと思う。

(田中委員) 10年前に新潟県女性財団のスキルアップの講座に参加し、財団の職員に育てられた結果が今の自分。一本釣りみたいな感じで何回か出ているうちに関わりをもって、機会を何回か与えていただく中で育ててもらった。かなり大変だと思うけれども、講座に参加している方の中でこれはという方とどれだけ関わっていけるかということが大切で、そういう人が何人か集まるとチームが作れる。育てていく視点が必要なのかなと思う。この見直し案はいい案だとは思いますが、書き方が見直し案の①と②で当落を決めて、当落が決まった後に採択回数の若い順から点数をよくして、その当落が決まったものの順位を決めるということが③と④だが、減じるという言葉が強すぎて、最初から減点する形で選んでいるようなイメージを受ける。この書き方だと①と②は男女共同参画の視点で評価しているので、我々委員がその事業が男女共同参画の筋が通っているのか見定めなければならないという責任が重くなるけれども、ここをきちんとしておくと、後は広報をどうがんばってもらうかということと、そこに長期的な視点をプラスしてもらおうと変わってくるのかなと思う。当否に回数は関係ない所を明確にしたらよいと思う。

(竹田補佐) 新年度の予算と事業計画の検討はこれからだが、見直しの所の書き方を修正し、来年度は皆様から検討いただいたこの方向で考えていきたいと思う。

(2) その他

(事務局) 次回の運営委員会は3月頃の開催を予定しているが、あらためて各委員の日程を調整のうえ案内する。